

Iwanamism 憧憬

寺田 陽人

かつて岩波文庫主義者なる者が大学にいたと聞く。彼らは岩波文庫の熱心な信奉者である。男女の学生が睦まじげにテニスコートで舞い踊り、薔薇色のキャンパスライフを楽しむ傍ら、彼らは五色の岩波文庫と互に見つめ合った。断じて他にすることがなかったのではない。義務的教育から解放された喜びを、知の大海が目前に果てしなく広がる喜びを謳歌しているのである。

彼らの陶醉ぶりは相当なもので、他に読み易い翻訳があったとして、岩波文庫にあらざる図書には目もくれず、日々大学近くの古書店を徘徊しては買い漁り、読み耽り、時として読んでいるふりをした。仲間内での甲乙は自然、これまでに読了した岩波文庫によって決され、十冊を読み通したものよりも三十冊を読み通した者が偉く、三十冊よりも百冊、百冊よりも千冊読み通した者が偉いとされた。既刊が千冊に達するか否かは定かではないが、実際のところ、そのほとんどが積読に終始する者、本棚にずらりと並ぶそれを悉く読みおおせた者、その別は画然、なぜならば、本人の風格そのものにはっきりと現れ出るからである。

◆34

こういう話がある。学生街にほど近い住宅街に、学生運動の時分の名残を忍ばせるアパートがあって、付近の大学に通う学生が入れ替わり住み着く定めになっていた。やや傾いた階段を昇ると回廊があって、手前から並んだ三つの部屋には岩波文庫主義者が起居していた。

いずれの部屋も満遍なく小汚いという点で合意しているのであるが、部屋の主人であるC君、B君、そしてA氏は、その性分からしても、主義実践の程度においても変わっていた。最も階段に近い部屋のC君は、実をいうと岩波文庫主義者の卵に過ぎない。入学して間もない頃に、知的で有意義な学生生活にすべく『善の研究』を手取るのであるが、大半の学生がそうなるように、度を越した難解さに熱を出して3日寝込む。分からないままに悶え苦しむ非生産的な学生生活を倦むようになり、それを機として、それから二、三の挑戦を経たものの、就職活動に精を出さねばならない今時分は皆が読む本を好んで読んでいる。にわかに読み始めた流行り本から得た知識は、なるほど目の難を越すには役立つかもしれないが、その先に待ち構える山谷の連なりを越すにはいささか心許ないのではないかしら、と、伝聞したに過ぎない私は思う。

回廊の中ほどに位置する部屋に住むB君は、小説家志望である。日夜名文が思いつかない焦燥に苦しみ、苦しみからの逃避として岩波文庫を手取るのであるが、今度はちっぽけな学生一人には到底知り及ばぬ世界があることに愕然とし、一旦本棚に戻してまた文章を推敲する、ということを繰り返している。彼は誰の目に留まらぬうちに巧妙な文章を書いてのけ、今に芥川賞を取って寮生の度肝を抜いてやろうと画策しているが、吉田兼好の「衆目にさらされないまま上達することはできない」という趣意の名言を教えてあげたかった、と、伝聞したに過ぎない私は思う。

最奥に構える角部屋はいよいよ並々ならぬ怪しさを帯びている。その部屋の主人であるA氏は最も熟達したその道の人であるだけに、寮生からの人望も厚いのであるが、大学生とは思えぬ貫禄から、多浪したのではないか、いやきっと博士課程にあるのだらうと囁かれ、大学に通う姿を誰も見たことがないので、本当に学生なののだらうかと疑われさえもした謎の人物であった。

あるときA氏の計らいで、寮生を集めて鍋を囲む会が催されたことがあった。とはいえA氏の部屋は図書と敷布団とどこから持ってきたのかというようなものが山積しているので、会場はB君の部屋であり、なんならこれから食そうという鍋も寮生が持ち寄ったものであったが、A氏の堂々たる泰然自若ぶりが、誰にもその光景を不自然がらせようとしな

35♦

「では諸君、いたどうか」

全くもってフリーライダーに過ぎないA氏の挨拶に夜会は始まった。ある学生は先日読んだ哲学書の、本流とはかけ離れた我流の解釈を披露し、ある学生は若かりし和辻の跡を辿った話をし、その傍らでA氏は久しぶりの肉を賞味した。しばらくして、酒精がいい塩梅で効いてきたのだらう、誰もがなんとなく聞いてはいけな

「Aさんはいつ卒業なさるのですか？」

それまで肉を頬張っていたA氏は一瞬考え込むような仕草をして、こう答えた。

「ふむ、急いではいけない、誰が『純粹理性批判』を一読して全てを理解できるものか。理解できた気になったとして、それは理解をしていないのである。一度

目は先人の偉容に振り返ちに遭い、二度目はちょっと分かったような気になるがやはり振り返ちに遭い、三度目もまた振り返ちにあう。四度目、五度目を経て、何かしら掴めたのであればその知は千金に値する。私は長旅の最中なのである」

結局A氏がいつ卒業するのかについては全く言明されていないのだが、もっともらしいことを従容として言ってのけるものだから、聞くものは何か啓発された気になるのは勿論のこと、彼の語りはいかなる愚者をも抱擁し得る懐の深さが垣間見えた。

この頃中学生時分から好いていた幼馴染を、文芸部の先輩に取られたB君が持ち出した、結婚は好きではない人とするべきである、という不毛な論題で侃侃諤諤の議論をするうちに夜はふけ、夜会の幕は閉じられた。

——というような、まだ人々が「愚」という貴い徳を持って居て、世の中が今のように激しく軋み合わない時分も今は昔のこととなり、生産性と有意義性のために東奔西走することに皆が躍起になっている。おおよそ大学からは岩波文庫主義者は絶滅したと言われているが、古書店にて、大学図書館にて、書齋にて岩波文庫を発見すると、あまりある時間を割いて慌てたり喚いたりせずに、しかし苦悶して着実に知の蓄積を試みた彼らを思い出し、親愛の感に浸るのである。